

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：31104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463251

研究課題名(和文) 地域方言の理解を助ける看護教育教材の開発

研究課題名(英文) Development of the nursing education teaching materials helpful to understanding of the local dialect

研究代表者

工藤 千賀子 (KUDO, CHIKAKO)

弘前学院大学・看護学部・准教授

研究者番号：70405728

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的の1つ目は、看護学生と教員が、方言を理解できなかった経験の有無とその語を明らかにすることである。2つ目は、看護場面で、患者がよく使用する方言を理解するための教育教材を開発することである。

看護学生が理解できない方言は、「症状語彙」やその「程度」に関する語であり、知っておいた方がいいと思っている語は、「身体語彙」において東北地域で、「症状・病名語彙」では、日本各地の学生で回答がみられた。教員が理解できない方言、知っておいた方がいいと思う方言は、ともに「症状語彙」であった。津軽地域における患者の訴えである方言を理解できる助けとなることを目的に、看護教育教材を開発・作製した。

研究成果の概要(英文)：1st of the purposes of this research is the case that a nursing student and a teacher make the yes or no and the word of the experience which couldn't understand a dialect clear. The 2nd is a nursing situation and a patient is to develop the educational teaching materials to understand a used dialect well.

The dialects a nursing student can't understand were "symptom vocabulary" and the word about "the degree", and the word by which I think it was better to know was a northeast area in "body vocabulary", and then the symptom "and" diagnosis vocabulary could judge an answer from a student in a various part of Japan. "Symptom vocabulary" met the dialect a teacher can't understand and the dialect by which I think it was better to know together. Nursing educational teaching materials were developed and made for the purpose of becoming the help which can understand the dialect which is patient's appeal in Tsugaru area.

研究分野：基礎看護学

キーワード：コミュニケーション 生活者 方言 教育教材 看護基礎教育

1. 研究開始当初の背景

看護実践の基盤となる言語的コミュニケーションに用いられる日本語は、共通語と地域社会特有のことばである方言を有する。方言が日常生活語である看護の対象者に対して、共通語だけでは日常会話はもちろん、看護学生がその訴えを理解することが困難で教育上支障をきたしている。さらに、現代の看護学生は共通語化の中で生活しており、生活している土地の言葉である「方言」ですら理解できないし、使用することもない。そのため、看護の対象者が話す「方言」を理解できるように教育することが喫緊の課題である。

看護学生が、方言を理解するために参考になると思われる方言集には、「医学沖縄語辞典」(稲福 1992)、「大分保健医療方言集」(大分保健医療方言研究会 2001)、「対話に役立つ飯田下伊那の方言集」(宮下ほか 2002)、「介護学生のための三つの津軽ことば」(横浜 2003) などみられるが、看護教育の視点でまとめられたものではない。

看護学における方言に関する学術研究を地域別にみると、九州熊本の竹熊らによる「障害文化としての『のさり』」(研究課題番号 13877415 2001～2003 年度)の研究や、大分県内の看護師等が大分弁体験集として作成し、看護の臨床現場において、初回遭遇時にその意味や用法を理解していればそれ以降はスムーズに対応ができたという報告がある(武司他, 2006) また、甲信越・北陸地域では、富山県内の病院に勤務する看護師が、微妙な身体状態を表現したり、親しみを感じさせたい場合などには、方言が標準語より効果的なことばであるという報告がある(平野他, 2007)。さらに、北海道・東

北地域では、秋田県県北に位置する農村地域における多くの患者、家族がくつろいだ場面では方言を、あらたまった場面では共通語を望む傾向にあると報告している(鵜木他, 2004)。

しかし、いずれも各地域の文化に根付いた方言を「文字化」した方言集であり、コミュニケーションによる対象者の話し言葉である「方言」を聴き取ることを目的とした視聴覚資料ではない。さらに、各地域の特徴の視点から得られた知見が、看護学教育の視点から体系化されているとは言えない。

2. 研究の目的

【目的 1】教員が講義や実習指導で方言を使用したり、看護学生が講義や臨地実習で理解が困難な方言の実態と、看護者が方言を使用することに対する意識の実態を明らかにする。

【目的 2】看護場面でどのような方言が出現しやすいのかを明らかにし、看護学生や看護者が理解するための方言マニュアルや、方言による会話および単語の音声・映像教材を作成する。

3. 研究の方法

対象大学・短期大学へのアンケート調査の実施および、教員対象面談インタビューへの参加の可否の確認を行う。

1) 学生対象調査

対象は、調査に同意が得られた「看護師学校(大学)」17校、「看護師学校(短大)」4校であった。学生総数は1,169名であった。方法は、自作による調査票を用いた質問紙調査とした。調査項目は、学生の属性(出身地域と現在の居住地域を含む)、看護教育を受け始めてから現在まで方言を聞き取れない経験の有無、経験がある場合は、対象の属性とそのことば、解決するための方法と

した。また、全員に看護場面で知っておいたほうがいい方言について自由記述を求めた。回答後の調査票は、回答者が直ちに封入し、投函してもらった。分析は、現在の居住地別に、理解困難な、また理解しておく必要がある語彙を抽出し、「身体語彙・動作語彙」「人間関係語彙」「病名語彙」「症状語彙」「感情語彙」「その他」に分類した。

2) 教員対象調査

対象は、調査に同意が得られた「看護師学校(大学)」17校、「看護師学校(短大)」4校の教員、総数387名であった。方法は、自記式の調査票を用いた質問紙調査とした。調査項目は、教員の属性、方言を聞き取れない経験の有無、経験がある場合は、対象の属性とこのことば、解決するための方法とした。分析は、理解困難な語彙を抽出し、「身体語彙・動作語彙」「人間関係語彙」「病名語彙」「症状語彙」「感情語彙」に分類し、単純集計した。

3) 教員対象インタビュー調査

教員に対しては、あらかじめ面談インタビューへの協力の可否を問い了解が得られた直接インタビュー調査の対象教員12名、電話による調査の対象教員12名であった。直接インタビュー調査は、研究者が対象教員の所属施設を訪問し、半構成的に聞き取り、その内容は了解を得たうえでICレコーダーに録音した。電話による調査は、研究者の研究室内の電話を用い半構成的に聞き取り、その内容は了解を得たうえで電話録音装置に録音した。分析は、逐語録を作成し複数回繰り返し読み、方言に対する心情や思いと判断できる語りを抽出した。

4. 研究成果

1) 学生対象調査

1) - 1 方言が理解できなかった経験の有無別結果

回収数は460部(回収率39.3%)であった。そのうち、無効回答19部を除外した441部(有効回答率95.9%)を分析対象とした。対象の性別は、女性406名(92.1%)、男性35名(7.9%)であった。年代は、20代430名(97.5%)、30代以降11名(2.5%)であった。現在の居住地は、北海道1名、東北109名、関東35名、甲信越1名、北陸91名、東海89名、近畿63名、中国29名、四国0名、九州・沖縄23名であった。また、中学まで過ごした出身地域は、北海道7名、東北109名、関東30名、甲信越12名、北陸67名、東海84名、近畿67名、中国35名、四国3名、九州・沖縄26名、その他(複数地域)1名であった。看護教育場面で、方言が理解できなかった経験があると回答したものは138名(31.3%)、ないと回答したものは303名(68.7%)であった。

現在看護教育を受けている都道府県と中学まで過ごした都道府県が同じである学生(以下 群とする)と違う学生(以下 群とする)別に、方言が理解できなかった経験の有無との関連では、経験があったと回答した学生は、 群に有意に多く($p=0.000$)、経験がなかったと回答した学生は 群に有意に多くみられた($p=0.000$)。

また、方言が理解できなかった経験があると回答した138名のうち、 群は105名(61.4%)、 群は33名(38.6%)であった。

今回の調査で、中学まで過ごした出身地域と現在看護教育を受けている居住地が違う学生が、話者の方言を理解できない割合が有意に高かったことは、人間が言語を獲得すると言われている中学時

代までに、その単語の音に触れる環境になければ、その言語を獲得することは困難であることが理由として考えられる。一方、出身地域と居住地域が同一である学生であっても、方言を理解できない経験を有していることは、中学時代までに、地域特有の方言を音声として聞く機会が少なく、その意味を理解し、言語として獲得していない結果であると考えられる。特に、話者が、青森県や石川県の場合、その土地に生まれ育った看護学生であってもなお、理解することが困難な現状が明らかになった。また、「弁」や「訛り」、「語尾」など、印象として記憶していたり、ことばを記憶しておらず想起して記述することができない「忘れた」、「思い出せない」という回答がみられた。看護の基盤となるコミュニケーションにおいて、対象者を理解する手がかりとなる言語的訴えを情報として得て、理解できているとは言えず、対象者との信頼関係の構築に支障をきたす可能性があると考えられる。

看護場面において、学生が、方言が日常生活語である看護の対象者の話すことばが理解できない実態が明らかになった。看護を実践するために重要な【症状語彙】やその「程度」を表現する語彙を中心に、音声教材を活用した方言教育の必要性が示唆された。

1)-2 看護場面で知っておいたほうがいいと思う方言の結果

回収数 460 部のうち、最終学年と判断できない 16 部を除き、444 部(有効回答率 96.7%)の「看護者が看護場面で知っておいたほうがいいと思う方言」の問いに回答があった 317 部を分析対象とした。看護場面で、看護者が知っておいたほうがいいと思う方言は、129 語、320 件抽出された。

回答があった 317 名を対象者が話す方言を聞き取れなかった経験の有無別にみると、経験があったもの 93 名(29.3%)、なかったもの 221 名(69.7%)であった。臨地実習で対象者の話す方言を聞いた経験だけではなく、聞き取れないで困った人から聞いたり、実習におけるカンファレンスで共有した結果、知っておいたほうがいいと思っていると考える。看護場面において、理解をしておく必要がある方言とその教育の示唆が得られた。

2) 教員対象調査

2)-1 方言が聞き取れなかった経験の有無別結果

回収数は 108 部(回収率 27.9%)、有効回答率 100%であった。年代は、30 歳代 22 名(20.4%)、40 歳代 41 名(38.0%)、50 歳代 28 名(25.9%)、60 歳代 12 名(11.1%)、20 歳代・70 歳代以上各 2 名(各 1.9%)、無回答 1 名であった。看護教育場面で、方言が聞き取れなかった経験があったと回答したものは 47 名(43.5%)、なかったと回答したものは 61 名(56.5%)であった。聞き取れなかった対象者について、のべ 69 件の回答があり、「臨地実習における学生の受持ち患者等」が 36 件と最も多く、「学生」や「同僚の教員」はそれぞれ 13 件、「臨地実習指導者」が 6 件であった。聞き取れなかった語彙は、「身体語彙」3 語、「動作語彙」2 語、「人間関係語彙」1 語、「病名語彙」はなく、「症状語彙」12 語、「感情語彙」4 語であった。その他「全く聞き取れなかった」「忘れた」「弁」という回答があった。

看護教育場面のうち臨地実習という授業では、教員はその時々再現性のない看護現象を教材化していく能力が求められる。養成機関が立地している地域の医療・福祉施設等で行われる臨地実習で、対象者の話

しことばである方言の理解は、現象を事実として捉え、意味を考えさせ、援助を導き出すという看護教育のために必須であり、看護教員が方言を理解する必要性が示唆された。

2)-2 看護場面で知っておいたほうがいいと思う方言の結果

回収数は110部(回収率28.4%)、有効回答108部(98.2%)だった。年代は、20歳代1名(0.9%)、30歳代22名(20.4%)、40歳代42名(38.9%)、50歳代28名(25.9%)、60歳代12名(11.1%)、70歳代以上2名(1.9%)、無回答1名だった。看護教員が知っておきたいと思う方言は、地域別に多い順に、1.東北で「身体語彙」12件、「動作語彙」3件、「症状・病名語彙」24件、「感情語彙」4件、「その他」22件、2.北陸で「身体語彙」「感情語彙」各1件、「症状・病名語彙」14件、「その他」6件、3.東海で「動作語彙」3件、「症状・病名語彙」18件、「その他」6件、4.近畿で「身体語彙」「動作語彙」各1件、「症状・病名語彙」4件、「その他」5件、5.関東・甲信越で「身体語彙」1件、「症状・病名語彙」4件、「その他」6件、6.九州では「症状・病名語彙」3件だった。

看護は、「症状・病名語彙」による対象者の訴えを事実として捉え、意味を分析し、援助を導き出すことが必須である。すべての地域に共通してみられた「症状・病名語彙」は、看護教員が対象者の方言による訴えを理解するために、知っておく必要性が示唆された。

3) 教員対象インタビュー調査

直接インタビュー調査に了承が得られた教員数は13名、電話によるインタビュー調査に了承が得られた教員数は13名で、合計26名であった。そのうち、日時の調整等の結果、インタビューが実

施できた教員数は、各12名、計24名であった。対象教員の調査時現在の勤務地を地域別にみると、東北11名、北陸2名、東海6名、近畿3名、九州2名であった。地域別に、方言に対する心情や思いと判断できる語りを抽出し、**キーワードを太字**とした(なお、特定の地名については、○○と表記する)。

3)-1 東北

例：この数年でまあよく～、**耳はなれるんだなぁ**ということが**すごく**感じましたね、

例：(学生は)イントネーションがちょっと変わってしまうと、全く聞き取れないみたいで、殆ど**通訳状態**でしたね、

例：なんか、**地元志向も強い**とか、なんか、そういうところもありつつ、・・・でもなんか、**外に対する思いもありつつ**、・・・

3)-2 北陸

例：方言だけじゃなくて、**地域性**という**かを理解**するような、**そういう教育が必要**なのかなと、お年寄りだから若いからとかではなくて。

例：(患者が)ご自分のふるさととか、**すごく大事**にしてる、やっぱりその言葉、方言とか、本当の**方言の裏側にある文化**とか、それがわかればいいなと思う。

3)-3 東海

例：なんか(方言で話したほうが伝わること)は**すごく**あって、患者さんが言葉の**なんていうんですか、ニュアンスとか**が**わかったほうが分かり合える**のかなって

例：実習の時には、患者さんに対しては地域の言葉を使うほうが断然やっぱり患者さんとの、**なんというか構える**というか、**標準語で話す**と**すごく構える感じ**がある。

例： 弁で語りかけると、そのほうが全然もう反応が違ってくるなという感じがしますね。**距離感**は**縮まる感じ**はします。

3)-4 近畿

例：（方言を使った）対応をしたほうが、
（距離感が）比較的とりやすいですね。

例：やっぱり言葉は違うって、それで断念した学生もいるんですね。やっぱり世界が違うみたいなの。おんなじことを言っても、なんか世界が、**文化の違いっていつのか、世界が違うように感じる**ので、関西弁の中では生活できないかもしれないって言うので、断念する学生も中にはいるんですね。だから、**自分の考えがちゃんと述べられない**って言うのがやっぱりありますね。

3)-5 九州

例：ただ、お年寄りと生活してた学生さんは、やっぱりあの、**正確じゃないにしてもニュアンスを受け取るのはあの、スムーズ**だと思います。

例：ところどころで少しわかりづらい言葉があるぐらいなので、**ニュアンスと前後の文脈から、なんとなくはまあ、わかって**帰ってきていて、

4) 教育教材の製作

今回の調査で明らかになった、看護者が知っておく必要がある「症状語彙」を中心に盛り込んだ視聴覚教材を製作した。より看護の実践に近い場面で、その語彙が語られる文脈から、方言の意味を理解できる場面を設定した。「津軽弁による単語編」DVDとして、観て、聴いて頂き、方言を話す対象者の心情を察した結果、看護者の発することばに暖かさが添えられた「ことばなさげ（ことば情け）」のいい看護者になることができると考える。津軽地域以外の看護者にとっても、それぞれの地域における方言に置き換えて、対象者の訴えを聴き取って頂き、訴える対象者の心情を理解するツールの一つの手がかりになることを期待する。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

工藤千賀子、看護場面で学生が理解困難な方言の実態、日本方言研究会第100回研究発表会、2015年5月22日、甲南大学甲友会館（兵庫県・神戸市）

工藤千賀子、看護教育場面で教員が理解困難な方言の実態、第25回日本看護教育学会学術集会、2015年8月19日、アスティとくしま（徳島県・徳島市）

工藤千賀子、看護学生が知っておいた方がいいと思う方言 地域別の実態 -、日本方言研究会第102回研究発表会、2016年5月13日、学習院大学創立百周年記念会館（東京都・豊島区）

工藤千賀子、看護教育場面で教員が知っておいた方がいいと思う方言の地域別実態、第26回看護学教育学会学術集会、2016年8月22日、京王プラザホテル（東京都・新宿区）

工藤千賀子、臨地実習指導場面で語られる方言の意味 - 東北地方における看護教員の語りの分析 -、第36回日本看護科学学会学術集会、2016年12月11日、東京国際フォーラム（東京都・千代田区）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

工藤 千賀子 (KUDO, Chikako)
弘前学院大学・看護学部・准教授
研究者番号：70405728

(2) 研究分担者

渡部 菜穂子 (WATABE, Naoko)
弘前学院大学・看護学部・助教
研究者番号：30550842